

平成29年度第2回長野県総合教育会議

日 時：平成29年10月10日(火)

10時30分～12時00分

場 所：県庁 議会増築棟 3階
第一特別会議室

1 開 会

(小岩企画振興部長)

これより平成29年度第2回目となります長野県総合教育会議を開会いたします。進行を務めさせていただきます、企画振興部長の小岩でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは初めに阿部知事から、続いて原山教育長から、順次、あいさつをお願いいたします。

2 あいさつ

(阿部知事)

おはようございます。本年度、第2回の総合教育会議を開催いたしましたところ、教育委員の皆様方には大変お忙しい中、ご参画をいただきましてありがとうございます。

今日のテーマは、教育委員会が中心に進めていただいております県立高校「学びの改革」、そして私どもが取り組んでいる次期総合5か年計画、さらには教育振興基本計画、これを会議事項として意見交換をさせていただきたいと思っております。

今日から総選挙になっているわけですが、教育の無償化がある意味、一つ論点になっているわけです。学びの教育行政にかかる経費、教育に要する経費をどうするかということも極めて重要なテーマだと思っておりますが、それとあわせて、やはり教育の内容をどうするかということが、今、まさに重要な局面ではないかと思っております。

日本の場合は学習指導要領に教育の中身が縛られている状況の中で、なかなか独自性を発揮しづらい部分があるわけですが、私はそれぞれの地域、あるいはそれぞれの学校が、学校の先生を中心にしながら、どういう学びを本来、子供たちに提供すべきなのかということを、もっと真剣に考えなければいけないと思っております。

この教育論議というのは茶飲み話で幾らでも議論ができますし、私も含めて全ての皆さんが学校教育を受けてきているので、自分なりの経験もあり、自分なりの考えもあるわけです。しかしながら、何かそういう思いがあまり教育政策に反映できない、あるいはできる場が少ないというのが、多くの県民の皆さんの思いではないかと感じています。

そういう意味で、是非、私は新しい総合計画の中心概念を学びにしていきたいと思っておりますし、是非長野県から、新しい学びのあり方というものを発信できるように取組を進めていきたい。

いろいろな制約条件はあるわけですが、教育現場の皆さん、あるいは県民の皆さん、そして教育委員会の皆さんを初め私たち教育行政にかかわっている人間が、しっかり方向性を共有して、子供たちのための、子供たち本意の教育になるように、今こそ力をあわせていきたいなと思っています。

そういう意味で、今日のテーマはいずれも極めて重要なテーマだと私は思っておりますので、是非率直な意見交換をさせていただき、いい方向づけができればありがたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

(原山教育長)

おはようございます。私からも一言、ごあいさつ申し上げます。

本日のテーマは県立高校「学びの改革」が中心的なテーマになります。少し議論の先回りをさせていただきますと、資料の中には「新しい時代にふさわしい新たな学びに転換」とあるのですが、新たな学びとは何かについては、明示しておりません。

今までの学びが知識詰め込み型、知識注入型に偏っていると、それではこれからの時代は持たないだろうということは、皆さん全て共通認識を持っていると思うのですが、これからの学びはどういうものに転換していかなければならないのかということについては、様々に語られておりますけれども、残念ながら、知識注入型といった確固たるイメージに対して、新たな学びについてのイメージがなかなか共有されていないというのが現実ではないかと思っております。

私は新しい時代というのは、ありきたりの答えなら機械が即座に回答してくれる時代だと思います。そうだとすれば、大量に答えを覚えることは意味がない。むしろ、答えよりも問いにこそ価値がある、そういう時代ではないかなと思っております。そのオリジナルな問いから新たな知識が生まれてくるということだろうと思っております。旧来型の知識注入型とするならば、例えば知識創造型といった、そういうものかなと思っております。

知識を創造するというのはどういうことなのかということを、先生が例えば身を持って示してあげるのも必要でしょうし、そのためにはどういう学び方が必要なのか、スキルとかマインドとか、そういったことをやるんだらうと思っております。自ら着想し、考え、まとめ、人に伝える、そしてフィードバックをもらいながらまた考えていくと、そういうサイクル、その場合にやはり自分の限界というのがあります。知識の限界、経験の限界、思考の限界、それをどれだけ広げながら、知識創造型の学びのサイクルに回してあげるかということが学校の役割、先生の役割ではないかと思っております。

今日はそんなことも含めて是非全員で共有し、新たな学びの姿を長野県からつくっていきたいと思っております。どうぞよろしく願います。

3 会議事項

(1) 県立高校「学びの改革」について

(小岩企画振興部長)

それでは会議事項に入ります。

まず会議事項（１）の県立高校「学びの改革」でございます。

資料１が用意されておりますが、既に委員の皆様にはご覧いただいているところでございますので、ポイントのみに絞った形で、原山教育長からご説明いただければと思います。よろしく申し上げます。

（原山教育長）

資料１、１－２、１－３とお示ししてございます。資料１－３にありますように、地域懇談会等から見えてきた課題もございますので、これらを整理する中で策定スケジュールを見直したものであります。

そして2017年11月には「学びの改革 実施方針」策定に向けてということで、懇談会等の質問、意見に答えるとともに、3月には「学びの改革 実施方針（案）」を策定したいと思っています。

ここにありますような中身を考えておりますので、そのたたき台を示しながら意見交換をそれぞれ実施して、策定に向けていきたいと思っております。

その前提として、「学びの改革」の3つのミッションと整理させていただきました。今、目の前にいる子供たち、高校生、あるいは次の高校生達のために、全ての高校で新しい時代にふさわしい「新たな学び」に転換するということが、ミッションの1つ目でございます。

そして、少子化を踏まえる中では、地域及び県全体の将来を見据えた「新しい学校」をこれからの子どもたちのためにつくっていくこと、これがミッションの2だと思っております。

そしてこれは子どもたちだけでなく、社会のために、グッドインパクトを与えるような、そういう改革にしていきたいと思っております。

その改革の実現プロセスについてはお示ししたとおりですが、3月に示したいと思っております「学びの改革 実施方針」、これは先ほど内容が明示されていないということについて問題意識を持ってしまして、これを是非内容明示型の実施方針として策定していきたいと思っております。

一つは、新たな学びへの転換ということを全ての高校でやります。そのために、それはどういうふうになるのかということをお示しする意味で、ディプロマ（DP）、カリキュラム（CP）、アドミッション（AP）という3つのポリシーを全ての高校でつくるということであります。そしてそのための指針を提示したいと思っております。

この3つのポリシーは高校の内部でつくるのだけではなく、きちんと社会、地域と対話しながらつくっていく、そういうプロセスを持ちたいと思っております。

それから同時に、入学者選抜制度が検討委員会から報告をいただきますので、その考え方を示したいと思っております。各校でそれぞれ改革を考える、それにプラスして県としてモデル校方式で改革を推進していきたいと思っております。検討例に示してありますようにスーパー探究科、大学のやる中身まで見据えたようなスーパー探究科でありますとか、現在やっていますSGHの後継として、ローカルな視点も加えたSGLH指定校をつくっ

たりといったものを検討しているところでございます。

そして、新しい学校は改革を牽引する、そういうものとして位置づけたいと思っております。トータルの全県配置構想の中では考えていきたいと思っております。

そしてこれらを踏まえて、以下に示すような工程のもとに、最終的には2030年度を完成目標として進めていきたいと思っております。

資料1-2にありますように、そうしたときの新たな地域の学びの姿、多様な学び場の基本的なイメージであります。

中山間地存立校と都市部存立校、それぞれ探究科等の特色学科あるいはモデル校、そして改革を牽引する新しい学校、さらには各学校が独自で取り組む魅力化チャレンジといったものをやっていきたいと思っております。

さらには、産業スペシャリストを育成する高校としてここに掲げているような内容、あるいは多様な学習ニーズ、不登校、あるいはそういった人たちに対する支援も含めた多様な学習ニーズに応える高校も考えていきたいと思っております。

そしてグッドインパクトということで、公民館と連携した多世代型の学びの場の創出等、社会と学校の相互作用を進めていきたいと思っております。説明は以上であります。

そしてもう一つつけ加えたいのは、先ほど言いましたように、新たな学びの場、新たな学びというのは一体どういうものなのかということの共通イメージを是非持っていただきたく、上田高校はSGH（スーパーグローバルハイスクール）で、それをさらに先進的、先導的に進めていただいております。その内容を内堀校長から是非説明をしていただいて、議論のテーマにもしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

（小岩企画振興部長）

原山教育長からご説明がございましたが、今日は上田高校の内堀校長先生にもお越しいただいておりますので、内堀校長先生から、「新しい時代の新しい教育」ということで、資料に基づいてご説明をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

（内堀上田高校校長）

上田高校校長の内堀繁利でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、「上田高校の教育」というプリントを配っていただいておりますので、それに沿って本校が目指しているもの、それから実際にどんな活動をしているかということについて、説明を申し上げます。

本校の学びの変革の転機となったのは、平成27年のSGHの指定でありました。前年度、アソシエイトという形で指定を受けていたわけですが、本指定を平成27年度に受けました。その時に本校が目指す方向として、これまでも自他ともに地域の進学校であるということは思っていたわけですが、そこに先進的な教育を実践する学校でありたいと、そちらの方向に舵を切るということ、学校の中でも、それから同窓会・PTA等でも宣言させていただきました。当時の同窓会長からは、その方向でやってくれと大変にご支援をいただきまして、現在もそんな方向で進めております。

S G Hの目的は、「社会課題に対する関心と深い教養、コミュニケーション能力、問題解決力等の国際的素養を持ったグローバルリーダーの育成」というものであります。

それに基づいて各指定校で様々な計画を立てて実践しているわけですが、2番目のところの左側に、本校がこの指定から2年半の間に行ってきたこと、あるいは現在行っていることについて、網羅的に書かせていただきました。授業中、1年1単位、2年2単位、3年は希望者の選択により課題研究を行っております。

それから、課題を発見する、あるいは課題研究を深める、もしくは、課題解決のためのヒントを見つけるためのフィールドワークに、1年、2年でコース別に出かけております。1年は県内へ日帰り、2年は首都圏へ1泊2日に出かけています。

その次にあります台湾研修旅行、これは4泊5日の全員参加で行っておりますが、この中でもフィールドワークを行っております。また、その台湾研修旅行は現地の高校生との交流なども含めて、海外研修の意味もありまして、これは全員で行っていると申し上げましたが、そのほかにフィリピンとボストンへのスタディツアーがあり、これは希望者で行っております。

それからICTの活用を積極的に進めています。もちろんプレゼンなどではICTを使いますが、それ以外に、例えば台湾の現地の高校生と交流したり、あるいは東京にある大学と交流したりという時にスカイプを使ったり、あるいはネット検索などをしたりといったことで積極的活用を進めています。

それから国内外の生徒等の交流、意見交換ということで、台湾へ行ったときには全ての高校生が現地の高校生と交流、あるいはプレゼンをして、それに対するコメントをもらうということもしております。ボストンスタディツアーでMITやハーバードへ行きますが、その時にもプレゼンを英語でさせていただいて、現地の大学の先生や大学生からコメントをもらうこと、本校に海外から来る生徒を積極的に受け入れたり、国内でも他校の発表会などに参加させていただいたりすること、そういったことを進めています。

それから国内外のグローバルリーダーの講演会を行って、その後に1時間から1時間半程度、希望する生徒との座談会を行う活動もしています。具体的には、MITで教鞭をとられていた世界的に有名な建築家のポール・ルケッツ博士や、あるいは在日オーストリア大使など、そういった方々が来ていただいた時にも、座談会を行っています。

それから、この2年半の間に連携協定を3つ結びました。1つは東京外国語大学、2つ目は佐久総合病院、3つ目が台湾国立栗苗高級中学ということであります。ただ単に連携協定を結ぶだけでなく、実質的な交流、あるいは連携が深められるようなプログラムを考え、行っています。

それから、卒業生と大学生による課題研究の指導ということで、S G Hで学んだ卒業生が出る前までは、例えば慶応大学や信州大学など、様々な大学の学生に入っていたいていましたが、これらに加え、S G Hに積極的に取り組んだ卒業生がだんだん増えていきますので、そういった卒業生が大学に行き、本校に戻ってきて指導できるというような循環型のシステムも、だんだん構築され始めています。

それから日本語・英語で発表する機会を内外でたくさん設けています。校内では、例えばPTA、中学生体験入学、小学生の体験入学もやっていますので、そういったところな

どで発表する機会、あるいは全員が行うSGH報告会、これは2年生が全員320人、壇上もしくはポスターセッションで発表していますけれども、そういった機会、それから大学等が主催している様々な発表会、さらにはSGH甲子園などという取組も始まっていますのでそういったコンテスト、それから国内のほかのSGH指定校などへも出かけて行って、発表しています。

それから、一人よがりにならないように客観的なデータを収集するというので、GPSアカデミー、これは思考力を判定するテストですけれども、そういったものや、GTECや英検などの英語力の測定なども行っています。

こういった取組を行っていく中で、先ほどの図に示したようなことに気づきました。というのは、地域の伝統校、進学校である本校に先進的な教育を加えていくと、物理的にも量が増え、なおかつ方向性も一致できないのではないかと考えて、本校のランドデザインを、時間がかかってもいいからじっくり先生方に議論をしていただいて、定めていこうと考えました。1年かかりましたが、本校の使命とか地域の中で果たすべき役割、どんな教育を行いたいのか、あるいは本校のこれから目指すべき方向といったことを議論して、将来になってほしい人間像を一番上に、その次に卒業までにつけたい力、そしてそのために必要な取組という3段階の「上田高校の教育が目指すもの」というものをつくりました。これは毎年変えていきますけれども、これに基づいて教育を行っておりまして、その一番下のところ、SGHが中核ではあるのですけれども、授業改善等もしていかなければいけません。例えば各教科の学習に、いわゆるアクティブラーニング的な要素も入れていかなければいけないでしょうし、SGHや授業だけでなく、例えば生徒会活動、ホームルーム活動、あるいは班活動といったものの中で、主体性というものを育てていかなければいけないだろうと考えています。

さっき言ったように、どんどん上に積み重ねていくと仕事量も生徒たちの拘束時間も増えてしまいます。これを解決しなければいけないので、様々な精選を行っていくということも同時に行っているところであります。

こういった取組の成果としまして、何点かを挙げさせていただきました。

まず1つ目は、全員プログラムと希望者プログラムというものを、SGHでやっています。全員を対象にした、必ず上田高校に入ったからには全ての生徒が行うというプログラムがあります。さらにその上に行きたいとか、あるいはもっとやりたいという生徒のための希望者プログラム、どちらも充実した形で行っているつもりですが、全体的にこのレベルまでというのと、それからどんどんやりたい子はどんどんやれるという仕組みの両方を構築して、それが機能しているのではないかと考えています。

2つ目は、こういった取組を行う中で生徒の雰囲気や学校の雰囲気に変化が表れました。そこに書かれているような言葉で表されるような方向に学校が変わっていると思います。明るさが出てきたり、積極性、元気が出てきたり、主体的になったり、行動的になったりというようなことが生徒の変化、もしくは学校全体の変化として表れています。

それから学校の外でも生徒たちの行動の変化が表れ始めました。例えばHL a bというハーバード大学に行っていた学生がつくった自主的なセミナーに参加をしたり、市町村もしくは全然別の組織が行っている海外研修へ手を挙げて参加したりといった動きが出てき

ました。

これは生徒が自分自身の中で完結している学びの変化でありますけれども、さらに社会に対する関心が向上することによって社会での実際の行動に結びついてきました。例えばフィリピンの恵まれない子どもたちのための募金活動ですとか、震災が起きたところへの募金活動、こういったことも生徒が自分で言い出すようになったり、カンボジアの子どもたちやその住民のための井戸を掘るプロジェクトを2学年全体で取り組むという中から、実際にこの1月にカンボジアに行って井戸を掘ってくるというような動きや、あるいはネパールの地震で壊れてしまった小学校を増築するという動きも、夏に生徒たちで行ってかかわってきました。

あるいはNPOなどで取り組んでいる、なかなか食事がとれない子どもたちのための子ども食堂へ、自分で手を挙げて協力する。その中から子どもの勉強を見始めるというようなことも生徒が提案して行うなど、社会にかかわる、あるいは社会を変えるというようなことも出てきました。

それから学力の3要素、多分今回の大学の改革や新学習指導要領も全て、この3要素をいかにつけるかというところで構築されていると思います。この3要素がまさにSGH活動、あるいは本校がグランドデザインとして描いている方向と合致していきまして、1つ目は知識・技能。これに偏りすぎていたのではないかという批判がある中で、思考力、判断力、表現力が2番目の要素。それから3番目が主体的に学習に取り組む態度、もしくは主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度。これらがまさに本校が目指す方向であり、SGHの目指す方向でありまして、SGHの活動を続けていくとそういったものが全体的に向上してきます。そして、今、大学も知識・技能だけでなく、学力の3要素をいかに見るかというようなところで、高校と大学の接続である大学入試も変わりつつありますので、当然、受験学力も向上するというようになっていきます。

それは、どこの大学に入るためというような、受験そのものを目的としたモチベーションではなくて、社会とつながったモチベーション、自分が社会に対して何ができるか、あるいは自分は何を学ぶのか、どうやって生きていくのかという、そういう内なるモチベーションに裏打ちされた、強い学びが行われているからだと考えています。

進学先も変化してきまして、SGUというのはスーパーグローバルユニバーシティですけども、SGHと同じような方向でつくっている大学があるんですが、そういったところの進学が増えています。これは自分たちが大学へ行ってもSGHの活動を続けていきたい、そういう方向で大学で学びたいという生徒が増えている結果だと考えています。それから数は少ないですけども、本校としてはおそらく初めてのことでと思いますが、高校から直に海外大学へ進学する生徒も出始めました。

ただ、課題もございまして、例えば課題研究、先ほど上田高校SGHの取組ということで、課題研究を1年と2年を全員対象、3年は希望者で行っていますと申し上げましたが、実は1年も2年も、40人のクラスに対して2人で課題研究を指導しています。授業以外では様々な教員がかかわっています。私も含めてかかわっていますけれども、授業自体は2人で行っている。本校の課題研究は個人研究ですので、40種類の課題研究が教室の中にあるんですね。それを2人で見ているというような状況がありますので、これはどうやって

もちよつと厳しいのではないかと。より成果を上げるためには少人数学級にするとか、あるいは授業サイズを変えていくというようなことが必要ではないかと思っています。

それからICTの活用につきましても、本校、電子黒板等入れていただいています、まだ県内では13校であります。これから全ての学校が課題研究をやっていくとなるとこういったことの充実も必要でしょうし、それから、学校でICTにもものすごく詳しいという先生はそんなにはいないんですね。例えば授業でこういう活動をしたんだけど、どういうふうによつたらそれが授業できるかというようなことについては、なかなか自分たちだけではやれない。本校にもICTの機器の導入と一緒にICT支援員という方を、年間で何日か来ていただけることになっているのですが、こういった方が常にいると、ICTの活用が飛躍的に進んでいくのではないかと考えています。あとは、子どもたちが様々な悩みを抱える中で、例えばスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーといった方も必要だと思いますし、現在は事務室と先生だけでつくっている学校のシステムを、「チーム学校」というべきほかのいろいろな力を学校に導入することによって、より教育効果を上げていくということがこれから必要だろうと思っています。さらには、予算の面、人的配置の面、そういった点が課題といたしますか、お願いしたい点と考えているところがあります。

長野県の教育、特に高校教育は、様々な学校のモチベーション、アイデアや動きと、それを裏づける予算や人的配置という物的な面とがリンクしていけば、さらに発展していくのではないかなと思っていますところでもあります。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。

それでは、ここからは意見交換とさせていただきたいと思いますが、内堀校長先生にはこのまま会議にご参加をいただきまして、現場の視点からのご意見を賜ればと思っております。よろしくお願ひいたします。

それでは、本日のテーマの県立高校「学びの改革」ということ、また、先ほどお話いただきました内堀校長先生へのご質問やご意見でも結構でございますので、それぞれ委員の皆様からまずご意見をいただきまして、それを踏まえて意見交換という形で進めさせていただきますと思います。

それでは、耳塚先生、よろしくお願ひします。

(耳塚委員)

初めに、内堀先生にお尋ねしたいことがございます。2つありまして、1つは、これまでの取組を今後とも維持していくためには、一体どのくらい年間に財源があつたらいいのかということが1点と、もう一つは、学習の仕方が変わるということから、スペースの活用の仕方とか施設とか設備の面で、こういう空間があつたらいいと思うというようなことがありましたら、お願ひいたします。

(内堀校長)

予算ですけれども、幾らということは、明確に言えないのですが、SGHの指定に伴って文科省から予算をいただきました。1年目は、およそ1,000万円だったと思います。その時には1学年の生徒だけが対象だったんですが、さらに少し持ち出しがありました。2年目は、2つの学年、1年生と2年生全部が対象になっていたのですが、逆に予算は減って900万円になり、今年は3年目で約700万円ということになっていますが、この間、同窓会からの支援や、あるいは生徒の個人負担といったものはかなり増えています。

これだけの活動を行う場合には、数字は明確に申し上げられませんが、大体そのぐらいの金額は必要だということです。活動を省けば別だと思いますが、現行の活動をやるためにはそのぐらいお金が必要だと思います。

それから2点目のところですけれども、上田高校、全日制と定時制がありますが、実は非常に校舎が狭いんですね。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、敷地そのものが狭い上に教室が少ないんです。例えば放課後に何かの活動をやるといったときに活動場所が足りないんです。だから、場合によっては、廊下や研究室の隅でディスカッションをしたりしているんです。本当に廊下で、ホールとかではないんですよ。あるいは放課後に学校で勉強をしたいとか、プレゼンテーションの練習をしたいということがあっても、そういったものができないんです。

例えば秋田高校に視察に行ったのですが、ゼミ室みたいなものがつくられているんですよ。そういったものも必要でしょうし、それから何か自由に、ちょっと立ちどまって昼休みなんかにそこで議論ができるような、ラウンジのような場所ですとか、そういった施設を活用して理想的には学校全体が本当に学びで満ちている空間になってくるとすごくいいと思うのですが、そういった雰囲気がつくりにくい施設になっています。要するに、授業を講義形式で40人でやって、以上終わりということを前提としたつくりになっているので、そういった点では施設も必要ですし、他にもいろいろなものが必要だと思っています。

(耳塚委員)

ありがとうございました。私も探究的な学びには、やはりそれにふさわしい空間というものがあつたほうがいいということを感じております。

例えば、富山県の富山市にあります富山中部高校というのは、探究科学科を新たに設置したときに、その探究科のための棟を建てたんですね。そこは演習室と、それから逆に大きな講義ができる階段型の教室、これも結構有効だと思うのですが、そういうものを備えたつくりになっていまして、こういうのが本当はできたらいいなと思います。単に新しくするというだけではなくて、新しいコンセプトに基づいた学校というのを、スペースの面でも実現できたらいいなと感じたところでもあります。

それから、もう2点だけよろしいでしょうか。一つは、学びの改革の成果をどうやって測って、どうやって見せていくかということが非常に重要ではないかと思います。例えば保護者は目の前に迫った大学入試の実績に無関心でいられないわけで、それとの関係をどういうふうに説明するかといったことも重要になってくるのではないかと思います。ただ、重要なのは、どんな大学に入るかではなくて、大学に入った後にどれだけ伸びるかという

ことだとか、あるいはさらには、社会に出た後にどれだけ活躍して社会に貢献できるのかということではないかと、先ほどご説明の中でもありましたが、そちらのほうがずっと大事なことだと思います。

ですから、そういう意味で、進学実績という面以外の改革の成果をどうやってきちんと示し、支持を得ていくのかということが重要であると思います。これは、示し方は非常に難しく、質的なものになってしまうかもしれませんが、工夫が必要だと思っております。

私自身も大学で初年時の演習を担当いたしますけれども、その演習をやってみると、高校までに探究的な学びの経験があるかどうかというのはすぐわかるわけです。探究的な学びの経験のある学生というのは、調べる、議論する、書く、こういったことに非常に秀でていて、見てすぐわかります。また、学びへの構えというのが、先ほど教育長も言っておられましたが、知識吸収型ではなくて知識生産型の構えになっていますので、これは大学での学びと非常に連続的な学びだと私は思っています。

間違いなく探究型学びへの質的な転換をするということは、大学での適用を容易にする。もっといえば、その先、多分、社会に出た後の仕事の仕方とも連続性が強いので、いいことではないかと思えます。

もう1点はスーパー探究科、あるいはSGLH指定校というのを設置する、これがモデル校として全体に対して波及効果を持つようなこと、そういう計画でございますけれども、これは非常に賛成で、積極的に設置をし、取組を進めていただきたいと思います。

その際、モデル校というのはやはり地域配置が重要で、全県に波及効果が出るような配置をうまく考えていただければと思います。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。引き続きまして平林先生、よろしく願いいたします。

(平林委員)

それでは内堀校長先生にちょっとお聞きしたいと思います。

非常にすばらしい教育活動をおやりになって、そして成果も上がっている。このことに、私は非常に敬意を表したいと思います。ただ、私も学校というところに勤めていた経験、昔のことになりますけれども、中学でいえば高校入試、高等学校でいえば大学入試、そういうものに随分影響される、ゆがめられる。したがって、先生の学校でこんなすばらしい取組をされている、こういうことがもっと効率よく、自由に伸び伸びとできるのではないかというような考えになられるときがあるとすれば、この入試制度というようなものに、もどかしさというか、もう少し変わってほしいなというような、そんな感想を持たれるようなことがおありになるのではないかと推察いたします。

例えば今度、国際バカロレア云々というようなものも検討課題に入っておりますように、随分変化もしたし改善もされ、進歩もしては来ていることは承知しております。私は、共通一次、それからそれがセンター試験に変わりました。あの頃に、長野県の校長会などが大学側の先生方と非常に細かく話し合うというようなことがありました。そのときに、共

通一次は、いわゆるバカロレアとかアビトゥーアとか、そういうようなものになっていくんじゃないかと、内心期待をして大学関係の先生方にお話したのですが、割と反応が鈍くて入試制度というものがそんなに変わっていないんですね。現に、私は松本に住んでおまして、異様な雰囲気だということ、松本駅周辺から始まってもう広範囲に学習塾、予備校、ものすごいんですね。ということは、いわゆる偏差値といわれる点数を1点でも、別の言い方をすれば、細切れの知識をできるだけ効率よく集積していくにはどうしたらいいのかということが、教育の本来のあるべき姿を見失ってしまっているのではないのでしょうか。私は、非常に残念な気がしているんですが、先生の個人的なお考えでもよろしいですが、お聞きしたいと思います。

(内堀校長)

大学入試と高校教育の関係だと思えますけれども、私自身も平林委員さんと同じで、忸怩たる思いをずっと持ち続けてきました。こういう教育をしたい、こういうこともやりたいのに、特に高校3年になるともう受験一辺倒で、大学に入るために、自分の本当の想いと違う教育を日々せねばならないという部分がこれまでであったことは事実だと思います。

もう一つは、先ほど耳塚委員さんもおっしゃいましたが、大学に入りますと全然別の世界があって、それまでやってきた受験勉強がまったく役に立たないとは申し上げないですが、あまり役に立たない。さらに大学で学んで社会人になったときに、大学で学んだものがあまり役に立たないということを自分自身が体験しました。短いスパンでなく、もっと先まで見通して、その上でそれぞれの発達段階に応じて、必要な力とか、モチベーションだとか、あるいは志といわれるようなものだとか、そういったものを育てていけば、もっと世の中が変わっていくだろうと思いを持っていました。

今回、高大接続システム改革、新学習指導要領、様々な中央で行われている改革、それから長野県の目指す方向、私は大きな枠組としては大賛成です。その理由は、今言った2つのことが解決される可能性があるからです。細かい技術的なところはいろいろあるかもしれませんが。

大学入試との関係で申し上げれば、大学の入試制度も既に変わってきています。耳塚先生のほうがお詳しいと思えますけれども、例えばAOだとか推薦といわれる、知識・技能だけではなくて、それ以外の要素のウエイトの高いような入試も増えていますし、今後は高校から大学に出す調査書も変わる予定です。そこには高校時代にどんな活動をしてどんな力をつけてきたか、あるいは場合によれば、もう課題研究として何をやったかというようなどころまで書き込まれる可能性がある調査書に変わります。

そうすると、まさにそういったものが一体となって、個人的に私がこうあったらいいなと思う方向に変わりつつあるので、平林委員さんがおっしゃっていたところから大分変わってきて、私、これで実は退職なので残念ですけれども、最後にいいご褒美いただいたなと思っています。

(平林委員)

内堀先生から詳しくご説明をいただきありがとうございました。また、学びの改革の全

体構造のご説明をいただき、資料を読ませていただいて、全体としてよく整っている、こうなっていけば素晴らしいなど、思いながら読ませていただいたわけです。

ただ、いろいろ感ずるところは細かいところではありましたが、それは時間の関係で省略して、資料1-3に、地域懇談会等から見えてきた課題というのがいろいろ書かれています。

このところについてだけ申し上げたいと思います。県民からはいろいろな要望があると思います。その中の一つに、少子化が急激に進んでいく中で高等学校の統合であったり、あるいは地域キャンパス化であったり、あるいは学科転換であったり等々、いろいろなことが起こってきているわけで、それに対しては、自分たちの地域の学校がこんなふうに変わっていく、新しい時代に即応した学校に変わっていくということに対する期待や喜び、そういうことがある一方で、様々な不安であったり、あるいは寂しさであったり、いろいろな思いがないまぜになっているということから、要望も多く寄せられるのだろうと思います。

私は、長野県で終戦直後の新制高校がいろいろできていく、あのときの統廃合とか、地域の学校組合から、あるいは市町村からの県立移管とか、あるいは校名変更とかいろいろなことがあって、新学制が整えられました。その後、長野県内で最初に統合した学校にかかわらせてもらったのですが、この町に高等学校が3つあるんだけれども2つだけ統合しても、もう10数年たてばもう一つの学校と統合しなければいけないというような状況が生まれるのではないかと、この統合は10年早いなと個人的には思ったことがありました。その時、やはり地域の人たちは、穏やかな人間性でしたから、表にはあまり出て来ないんですが、非常に複雑な思いでこの2つの学校が統合されていくところを、期待を込めながら見守っていてくれたことを思い出しています。

これから学校の統合等々、大きな変化、大きなうねりが来るわけですが、よく地域の人たちの声もきめ細かく聞いて、そして建設的な方向へ吸い上げて、事を進めていっていただければと思っています。

私も、町が合併して母校なし、小学校も中学もありません。前に小学校で通ったところ、中学で通ったところ、友だちと一緒にになって藁ぞうりを履いて通ったところですが、そういうところはもう何の跡形もなく、ある工場になってたり、草ぼうぼうになって、その中に、ここに何々小学校ありきというような碑がポツンとあったりというようなことで非常に寂しい思いをしています。かつてあったものがそのまま永久不滅にということは全てに通用はしないとは思いますが、地域の人たちの胸のうち、お気持ちというもの丁寧にくみ上げてそして理解を、県なら県の教育委員会が進めていく方向というようなものの理解を、本当に心の底から理解をしていただくというような、そういう努力をしていただければという思いを述べて、全体の感想とさせていただきます。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。それでは、矢島委員、よろしくお願いします。

(矢島委員)

私は多様な学習ニーズに応える学校というところの視点から、少し話したいと思います。

どういう子どもを育てたいかという大人側の視点もちろんとても重要ですが、それと同時に子どもがどういう学びをしたいかという、その子ども本意の視点ということもとても大切になってくると思います。

資料1のところの3つのポリシーということで、最後のアドミッションポリシーがどのような生徒の入学を望むのかというという視点ですが、例えば不登校や虐待、貧困の家庭など困難を抱えた子どもというのは結構排除されやすい、選択肢が少ないという状況の中で、学校側がどのような生徒の入学を望むかという視点だけですと、そういう子どもたちが排除されてしまうのかなと思います。

例えば児童養護施設の子どもの昨年度の大学等の進学率ですが、長野県全体で76.8%に対しまして、児童養護施設の子どもの進学率が17.2%という、かなり低い進学率、学ぶ意欲というもの、夢や希望もなかなか持てないような状態かなと思います。

いろいろな子どもがいる中で、私は是非、様々なタイプの高校、特色を出していただきたいという希望がありまして、例えば妊娠してしまって、妊娠したら退学ということではなくて学び続けられるように、大胆ですが高校内に託児所があるとか、これは若年妊娠を勧めているのではなくて、現実には望まぬ妊娠であるとか思わぬ妊娠をしてしまう子どももいます。ですから、そういう現実をしっかり見て、一人ひとりのその人生をトータルで見るといふことであれば、この子の妊娠がこの子の人生においてどういう意味があるのか、中途退学しなければいけないという一つの選択肢ではなくて、学びの保障という観点から、やはり私は、妊娠・出産しても学び続けられるという選択肢がほしいなと思います。

それから、魅力ある多様な学びの場で、私立の学校の誘致ということですが、私はとても魅力があると思います。今、結構、長野県に様々な私立の学校が建設されていますが、私は是非これを公教育で実現してほしいと願います。私立だからできるのではなくて公立でもできる、建物全て含むそのような環境を整えて、私は誇りを持って改革をしていただきたいと願っております。

特色を出すという視点から見ると、とても大胆な発想かもしれませんが、株式会社学校というような発想ということも可能かなと思います。先ほど、内堀校長先生から上田高校の様子を発言いただきましたけれども、上田高校のように、学校にはやる気のある先生が大勢いて、アイデアもすごくたくさん持っていますので、是非、その横並びではなくて、先生もやりたいことができる学校、そしてそのことを認められるように、そういう長野県になってほしいなと思います。

先生がワクワクして楽しそうに教えられている姿というものが、子どもにも学ぶ楽しさというものも伝わってくると思いますので、是非そのようなことが実現できる改革を願っております。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。続きまして、荻原委員、よろしく願いいたします。

(荻原委員)

私、今回の学びの改革、先ほど教育長からなかなかわかりにくいというお話もありましたが、私は私なりにこの学びの改革、学びの改革が行われたときにどういう状態になるのか、あるいはこの学びの改革を別の言い方をしたらどんなことになるのかと思って考えさせていただきました。これを少し私なりの言葉にかえさせていただいた場合には「夢を見つけて夢を形にする」、そういう方向性の改革ではないかなと何となく考えておりました。

どうしても私の頭は、全部スポーツだらけなので、そういう形になってしまうのですが、例えばスポーツ選手は、どうして練習を一生懸命やっているかという、結局、オリンピックの金メダルをとりたいというような具体的な目標があって、そのために自分には何が必要かということから始まり、ではどういう練習が必要なのか、どんな環境で練習していくのがその夢を達成させていく上で重要なのか、という道筋になっていくと思うんですね。

そういうところから考えると、今までの教育というのは、とにかく練習ばかりやっていて、夢も目標もないところで練習ばかりやらせていて、後はもう準備はできたから夢や目標は自分で見つけてくれ、もう勝手にやってくれというようなことだったのかもしれない。

だから、そういう意味では、今回の学びの改革の方向性というのは、まず子どもたちが、自分はこれからの社会に出て行ったときに、自分はどんな役割ができるんだろうか、あるいは自分はどんなことでこの社会の中で生きていけるんだろうか、どんなことに貢献できるんだろうか、そういうことをやはり見つけていく作業ではないかなと思っています。

その中で内堀先生の先ほどお話をお伺いして、上田高校ではいろいろな取組の中で、社会課題に立ち向かっている方々との交流はたくさんあると思いました。上田高校に入ったときにはまだ具体的に夢や目標がなかったけれども、そういう社会課題に立ち向かっている人たちとの交流の中で、そういう人たちが非常に光ってかっこよく見えるんだと思うんですね。あっ、俺もこういう人になってみたいな、俺もこんな取組をしてみたいなという、そういう夢の発見があり、では僕はこんな勉強したいな、やはりこういう学びをする必要があるんだなという内発的な欲求につながっていくんだろうと思います。そういう意味では、この上田高校の取組というのは非常に参考になる取組ですし、この長野県下全体に波及すると大変いいのではないかなと思っています。

その上で、内堀先生にご質問申し上げたいのは、先ほどご説明をいただいたところに進学先の変化とありました。これは、生徒自身が自分にフィットした進学先を選択しているというお話だったかと思います。生徒自身は、自分はこういうところに進学をしたいという思いと、その保護者が、あなたそんなところへ行くのという思い、要は生徒と親の思いがマッチしているのか、生徒はここに行きたいんだけど、親としてはやはり東京大学じゃなければ困るみたいなの、そういったミスマッチがあるのか、その辺を、簡単で構わないんですが、お答え願えればと思います。

(内堀校長)

多分、ご家庭によって違うと思います。ただ、変化は起きています。例えば入学の時点で国公立に入ってほしいという保護者が多いんです。それが本当の意味で経済的な理由で

あれば仕方ないんですけれども、例えば国公立に入っても、東京に住めば生活費が結構かかってしまいますよね。そうすると、トータルとしての費用をデータで示すと本当にどうなのかなみたいなのところもあったりします。

それから、ちょっと話がずれるかもしれないんですけれども、中学生体験入学のときに、いろいろ工夫して説明を申し上げているのですが、今までの事後アンケートだと、重要なものとして進学先とか、どの大学に何人の合格者がいるのかというところにもものすごく注目が集まっていました。あともう一つは部活動だったんです。

今回、特徴的なアンケートの結果が出まして、上田高校が新しい教育を目指して新しい取組をしているということがよくわかったというパーセントが増えたんですよね。ですから、保護者の方も様々な情報を基にいろいろな考えを持っておられると思うんですけれども、実際に学校の様子や、生徒の活動を見たり、社会の動きや学校の目指す方向がわかったり、生徒が自分で語る言葉を聞いて、その生徒がどうしてその大学へ行きたいかなんていうことがわかってくると、比較的、今の親御さんというのは、お前がそう言うならそこへ行ってみたらという割合が多いので、変わってくる可能性があるんじゃないかなと思っています。もちろん、もう何が何でもここへ行ってほしいみたいな親御さんもいます。ただ、変化はちょっとあらわれています。

(萩原委員)

ありがとうございました。何でそんなご質問をさせていただいたかというのと、この資料1-3の中に「探究的な学びの推進で大学に進学できる学力が養われるか不安」とあります。多分、特に親からの不安だと思うんですけれども、今のお話のように、大学入試も変化していることであるとか、受入体制だとか、夢や目標を持ってそれに進んでいくことが、やはり今の教育に求められているのだということを、親自身が知って変わっていかないと、親に対する説明もしっかりしていかないと、探究的な学びが本当に進学につながるのかという不安も解消されていかないのではないかと考えておりました。

(小岩企画振興部長)

では塚田委員、よろしく申し上げます。

(塚田委員)

今、萩原委員が言われたことと関連しますが、どうしても学校、高校を選ぶとか評価するとき、客観的には、それがいいこと悪いことは別にして、進学あるいは英検がどうかとかという話になると思うんですね。

その辺は内堀先生から見ていて、学年ごとにだんだん進んでいく中で、大分変わってきたよというような変化があるのかどうかということはいかがでしょうか。子供たちの本当の意味での進学先ですとか、いわゆる英検を受ける生徒が増えたとか、そういう客観的な数字というのはありますか。

(内堀校長)

英検の受験者数・合格者数は増えています。お金がかかりますので希望者という形をとっていますが、かなりのパーセントが受けています。

それからここに書いてある、GTEC for studentsというのは、これは全員受けていただいています。

あとは、進学の指導の仕方も、私はあまり好きじゃないんですけども、難関大学とか旧帝大とか、ああいう受験産業に沿ったような形で高校の進路指導も語られているんですけども、そういうくくりはおかしいと思うんですよね。

例えば自分が、中学時代にどこどこ大学へ入りたいと思っている子はほとんどいないと思うんです。どこの大学に何人ぐらい大体入っている高校かということさえ示せばいいわけで、実績をわかりやすく示そうとするあまりに何か変な、変なと言ってはいけないんですね、そういうくくりで何人みたいな、私もSGUと言ってしまっているんですけども。そういう指導を高校側もこれまでしてきた経緯があると思うんですよね。そういったものがこれから意味を持たなくなると思っています。

それから国公立について言うと、県内の公立大学が増えますよね。そうすると、長野県から国公立大学への進学者数って、増えるんじゃないかと思っているんです。当たり前のことなんですけれども。そうすると、国公立に何人というような指標がこれから本当に意味を持ってくるのかというようなこともあると思います。

生徒の意識としては、どこどこ大学に入りたいというような場合に、それが世間の指標でこのレベルのこの偏差値のところだからという子ももちろんまだいますが、同時に、さっき言ったように、自分がこういうことをやるためにはこの大学が一番自分が学ぶのにふさわしいからという子も出始めているので、そこはうちの学校としては大きな変化だなと思っているところです。

(塚田委員)

すみません、誤解のないように申し上げますけれども、私は世の中がやはりそういう評価しか、今、価値の判断基準を持っていないということを気にしたわけでございまして、今の教育は本来はそうあるべきだなと思っています。

例えば上田高校の生徒が、長野県に戻ってきてくれるのかどうかという点ですが、やはり企業あるいは産業界ともっと、モチベーションの問題も含めて接点を持つべきだなと思っています。

もう一つ、学びの改革の時間軸、先ほど耳塚先生にもお話し申し上げたんですが、改革の完成が、資料1だと2030年になっていますね。高校生が31歳になってしまうという、こんな長くていいのかなど。その間に、もちろん再編の問題はありますが、いわゆる、思想的な問題というのは、時代の変化とともに調整していったらいかがなと思っています。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございました。ただいま、各委員からご意見いただきましたが、ここまでの議論を踏まえまして、原山教育長、または阿部知事何かありますか。

(原山教育長)

塚田委員がおっしゃられた完成年度が2030年は遅いじゃないかと、それはまずミッション1、新たな学びに全ての高校が転換するんだというのは、すぐさま取りかかり進めていかなければいけないことだと思っています。先ほど内堀校長先生がおっしゃられた、こういう学びに変わるんだよというのは、すぐさま取りかかってやっていかななくてはならないという話だと思っています。

その上で、新たな高校を設置するには少なくとも5～6年は必ずかかります。その結果として、その新しい高校までできた完成形が2030年ということでございます。そこだけご理解いただきたいと思います。

(阿部知事)

皆さんのお話に関連して、私もいろいろお話しさせていただければと思います。内堀校長がかなり前向きな取組をさせていただいているので、我々がやっていかなければいけない方向性がある意味、具体的に見えやすいのかなと思っています。

まず、塚田委員の話で、学びの改革の件ですが、私は箱の話と中身の話は明確に分けたほうが良いと思っています。一般の人は、「高校をどう再編するかという話でしょ」と思っているのではないかと思うのですが、ここで話しているのは全く違う中身の話なので、そこは多くの人たちが正しくわかってないのではないかと。

本当に改革をしていこうと思ったら、現場の先生方と保護者はもとより県民の理解が不可欠なので、最初のスタートのところが間違えると全く違う話になってしまう。そこを私は非常に懸念しているので、もう少し明確に分けてもらったほうが良いと思います。

それから、各委員の皆さんがお話されたことで、順不同になってしまいますが、塚田委員がおっしゃっていただいた、あるべき論と世の中の評価、これはやはり本音と建前を使い分けていると、いつまでたっても同じ議論をしなければいけないのではないかと私は思っています。

例えば県立大学をつくりました。県立大学の入試は一般入試以外でも、自己推薦など多様な入試の仕方を取り入れようとはしていますが、設置主体としての私としては、やはり最初の大学に入ってくる学生の偏差値というのはどのくらいになるのか素直に気にしています。だけど、本当にそれがいいのかどうかというのは迷っています。つまり、偏差値の高い子どもが入ってくるのがいいことと受けとめればいいのかを迷っているということです。それよりもむしろ卒業するときに、すごいな、伸びたなという学生をいかにつくれるかが本当の大学の役割のはずなので、入口のところをあまり気にしてもしょうがないんじゃないかと思っています。

だけど、世の中はそんなことでは多分評価しないので、おそらく高校の校長を初め先生方もそこは結構悩まれるのではないかと。世の中の評価と本来あるべき教育というのは必ずしも一致していないのではないかとというのが私の問題意識です。例えば、毎年、大学受験のシーズンになると、週刊誌がどこの高校はどこの大学に何人入ったかという特集をやります。私、あれ見えています。うちの県の高校はどうかと気にしています。本当にそれがいいかどうかというのは違うと思っています。でも世の中はあれで見えていると思っているの

で、本来あるべき姿と、いわゆるメディアとか世の中が評価している形というのが徹底的にずれているのを正面から向き合っていないと、いつまでたっても同じ話を繰り返すことになってしまうのではないかと考えています。これは私の問題提起ですけれども。

それから、耳塚先生がおっしゃるとおり、私は新しい学校をつくるのであれば、確実に空間は変えなければいけないと考えています。40人なり50人なりが同じ方向を向いて黒板に向かっている姿は、全くクリエイティビティに欠けているというのが私の認識なので、学校のあの教室の形からして変えないと、多分、発想も変わらないだろうなと思います。

何かそういう目に見えるものを県民の皆さんにちゃんと示さないと、ただ何となく、学校の数が、2校が1校になるみたいな話ではないと私は思っているので、何かそういうことをこの学びの改革の中で示していかないと、多くの人たちはあまりそういう発想はないんじゃないかと考えています。財源の話はやり繰り返さなければいけないので大変ですけれども、やるからにはそういうことをやらなければいけないと考えています。

それから、平林委員がおっしゃった入試の話は、そこはしっかり考えなければいけない部分だろうと思います。さきほどの本音と建前がずれている世界というのはやはり誰かがどこかで変えていかなければいけないので、私は学習県だった長野県がまず率先してそこを一致させ、一致させる上では、やはり県民の皆さんの広い理解がないと多分無理だと思います。

多くの皆さんは週刊誌を見たり、学力テストの成績を見たりして、これが上がっているほうがいいと、おそらくほとんどの人は思っているんじゃないかと思うので、そこを変える明確なメッセージを出さなければいけないと考えています。相当そこははっきりさせなければいけないと思いますし、この理念とか価値観は一体何なのか、この改革の理念は何かということをもっと掘り下げてクリアにしていかなないと中途半端な形になってしまうんじゃないかという懸念を持っています。そこは教育委員会では是非しっかり考えていただきたいと思っています。

それから、矢島委員のおっしゃった多様性の話は私も極めて重要だと思っていて、アドミッションポリシーを決めるときに、例えば点数、今は1点でも上の人間を評価して入試を合格させているんじゃないでしょうか。それは日本の常識ではそうだろうけれど、世界の常識は必ずしもそうじゃないので、本当にアドミッションポリシーをつくるというからには、多様な生徒を受け入れる。例えば児童養護施設に入っていた子どもを優先して入れますとか、それって今までの教育としてはあり得ないやり方だと思うんですけれども。

アドミッションポリシーを本当に考えるというのであれば、そこまで踏み込んで検討していかないと意味がない。今までやっていることを是認するようなものをつくっても、単にやっていますという話になってしまうのではないかと考えています。

荻原委員のおっしゃった、夢を見つけて夢を形にする改革、これすばらしいなと思っています。さっき言ったように、今回の改革は何のためにやるのか、これが明確に子どもたちや保護者に伝わらないと、極めて中途半端な改革に私はなってしまうのではないかと考えています。

私も、荻原委員がおっしゃっていただいたことを普遍化していけばいいのではないかと考えています。みんながみんな同じ職業につく必要もないし、スポーツが得意な子もいれば、

芸術が得意な子もいれば、算数が得意な子もいるから、いろいろな子どもたちが多様な能力を自分で見出して、自分でそれを生かしていける道を示してあげられるような教育というのが私は本来望ましい。やはり今の子どもたちはかなり受身になってしまっているんじゃないかと思います。自分で学ぶのではなくて、人から言われているからとか、今はこれやらなければいけないからしようがないからやりましょうという主体性がない学びをやっていると、いつまでたっても、本来の意味の学びになっていかないのではないかと思っていますので、そういう意味で、内発的な欲求と荻原委員がおっしゃっていただいたのですが、これをどう導き出すかがまさにすごく重要な話ではないかと思っています。

これは教育委員会、内堀校長なり教育長なりに訊きたいのですが、まず学校とか先生というのは、何にコミットしているのかということをはっきりさせたほうがいいんじゃないか。何かいろいろなことをやらなければいけない状況になっているんですが、やはり何にコミットするのか、ここの学校に入った君にはこれを提供するよというぐらい、はっきりさせる必要があるんじゃないか。

それから、私の立場でいうと、学校のガバナンスというのは、大きな改革をやろうとすればするほど実はしっかりさせなければいけない、はっきりさせなければいけないと思っています。ガバナンスというのは、内堀校長は非常に主体的に改革をやっていただいて私は大変評価しているんですが、では各学校でそれぞれやればいいのかというと、教育委員会、長野県全体としての大きな方針と、各学校の取組というのをどうやって調整するのという話もある。あるいは、もっといえば県全体の人材育成、例えば県立大学を含めた高等教育、あるいは小学校、中学校とか幼児教育とどう連携させるのかというのは、各高校が主体的にやっていただく必要がある部分と、そうではなくて、長野県全体の教育の方針にある程度即して考えてもらわないといけないところと両面あるので、私はある程度、現場が主体的に取り組まなければいけないとは思っているんですが、そのバランスをどうとるのかというのは是非しっかり検討してもらいたいと思っています。

いろいろ申し上げましたが、是非もう少し踏み込んだ価値観の提示をしていかないといけないと思っているので、県民や経済界も含めて県民全体に、どういう改革をしていこうかということをもっとしっかり落とし込み、なかなか本音と建前が違っている社会なので難しいと思っているので、是非皆さんと一緒に考えたいなと思っています。

(原山教育長)

内堀先生からお話いただくことが多いと思いますが、後段言われたガバナンスの問題ですけれども、まさしく、それは私どももそのとおりだと思っています。

各学校が、先ほど先生がおっしゃったのは、1年間かけて先生たちが侃々諤々の議論をした上でまとめましたと、そこは結果的には現場が動かない限りは何も進まないというのが一つあります。でも現場があちこちの方向に行ってしまったならば、資源の有効活用という点で考えたら絶対だめなので、そこは県としての統一性をしっかり示しながらやっていくという、そのやりとりをしながら行くと考えています。

(阿部知事)

補足するけれども、ガバナンスの話というのは、例えば県の方針で束縛するという局面もあると思いますが、もう一つは、学校現場の中の議論というのは、多分、私がイメージしているよりももう少し現実的になるだろうと思っています。もう少しアドバンスを広げた議論を現場でもらえるような、こういうことまで考えてもいいよということを提示しないと、どうしても学校現場は、現実の子どもたちと向き合っている中での現実的な改革という方向になりがちなので、私はむしろ逆にもっと広く考えろというようなこともメッセージとして出さなければいけないと思っています。

(原山教育長)

了解です。わかりました。

それから、先生方のミッションではないですけども、どう考えてやっているのかという話をお願いします。

(内堀校長)

個人的な考えですけども、学校というところは、子どもたちが入ってきて、3年間とか4年間をお預かりして、学校の中と外、その全部で、いろいろな経験をしてもらう中で、子どもたちの総合的な人間性の成長だとか、あるいは人格の完成が目的なので、いろいろな要素が散りばめられていて、さまざまに育っていくことが必要だと思うんです。

ですので、例えば尺度が1個しかないような学校をつくってしまうと、そこからこぼれた子はもう何のモチベーションも持てないんですね。だから学校というのは多様なものを用意して多様なものを育てていく部分が必要であると、私はずっとと思っています。その多様な部分というのが何なのかというのは、それはまたいろいろな議論の余地はあると思うんですけども、例えば教科指導であったり、部活動であったり、あるいは生徒会活動であったり、本校のSGHのような活動であったり、子どもたちがそこで学んだことが総合的に血となり肉となって、その高校を出ていくということが重要なことだと思っています。

(小岩企画振興部長)

各委員からもご発言あればいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。よろしいですか。それではすみません、時間の制約ございますので、恐縮でございますが、会議事項の1につきましては、ここで区切りとさせていただきたいと思います。

(阿部知事)

内堀校長から問題提起された、40人クラスを2人で指導しているという話は、私は改善しなければいけないと思っているんですけども、ただ、教員免許を持っている人たちだけでやるのがいいのか、そうではない外部の人たちをもっと生かしていくのがいいのかというのは、私はどちらかというところ、もっと後者のことも考え、学校の先生以外のいろいろな社会経験があるような人とか、もちろん誰でもいいというわけではないと思いますが、少しそういうことも考えながら指導できる体制を整えていかなければいけないと思

います。

それから、是非ICT支援員の話は、支援に何日間か行く程度の話ではなくて、本当は各学校にいたほうがいいと思いますし、今日のプレゼンも、映像で上田高校は今こうなっているんだということをお示ししてもらおうと、多分、県民の皆さんには確実に伝わるはずなので、是非そういうことも含めて学校のICT化だとか、見える化、可視化を教育委員会にはしてってもらいたいと思いますので、是非考えていただければと思います。

(2) 次期総合5か年計画及び第3次長野県教育振興基本計画の策定について

(小岩企画振興部長)

それでは会議事項の(2)にまいります。

次期総合5か年計画及び第3次長野県教育振興基本計画の策定についてということでございます。こちら現状のご報告と情報共有ということでございますので、それぞれ事務局から、現状についての説明をさせていただきます。まず総合政策課長から。

(伊藤総合政策課長)

総合政策課長の伊藤です。よろしくお願いたします。資料2をお願いします。次期総合5か年計画ということで、現行プランが今年度で終了するものですから、来年度からの5年計画を今、策定しているところです。

4の策定日程をご覧いただきたいんですけども、昨年11月2日に、総合計画審議会に県づくりの方向性について諮問をしました。8月25日まで5回開催しておりまして、今月の下旬に最終的な審議会で答申案をいただき、今後、2月に計画案公表に向けて、今、作業を進めているところです。

資料2-2をご覧ください。A3の資料ですけども、これは前回、8月25日第5回に出した資料です。まだ事務局と委員と意見交換をしているものですので、表現が変わってまいります。

左上のところの策定の趣旨ですけども、単なる5年計画ということではなく、おおむね2030年ごろを展望した上での5年の行動計画という形にしていきたいと考えております。

右のほうに、5年間の政策の柱というのがあります。5つ、学びを筆頭にしまして、最後、地域力・自治力とあります。本県、やはり、それぞれみんなが主体的に学んで自ら課題を見つけ、行動していくという学び、それから地域に自治というものが根づいておりますので、これこそ長野県の特徴だと考えております。

この2つを政策の推進エンジンとしまして、産業ですとか安全・安心ですとか、暮らしというものを進めていくというような形で、今後変わっていくと思いますが、いずれにしても、この学びとか自治の力で新しい時代を切り開いていくんだという、そういったニュアンスで5か年計画を策定していきたいと考えております。そのトップに学びの県づくりということで、教育振興基本計画との親和性もあると思いますので、その辺はしっかり整合をとっていききたいと思います。

(小岩企画振興部長)

原山教育長。

(原山教育長)

資料の3になります。第3次長野県教育振興基本計画の策定状況についてということですが、計画策定の進め方にあるとおりの段階を経ておりまして、それを踏まえて、資料3-2でたたき台的なものを示させてもらっています。この中で、左側の長期的な教育振興の方向性ということで基本理念、それから「学びの県」4つのコンセプトとありますが、これは総合5か年計画と密接な関係を持っておりますので、まだ仮ということを示しております。大きく変わっていく可能性もありますが、そういう方向を示していきたいと思っております。

重点政策について、有識者懇談会等で議論をしていただきまして一定のものを整理させてもらっていますが、これも今後5か年計画の中の取組と整合性をとりながら進めていきますので、今、企画振興部と調整をしつつ進めているところでございます。

そういう状況だということをご理解いただければと思っております。

(轟こども・若者担当部長)

続きまして、こども・若者担当部長の轟でございます。よろしくお願いいたします。資料4をお願いいたします。

子ども・若者支援に関する総合的な計画でございますが、こちらにつきましては、4月の第1回のこの会議でもご説明し、総合的な5か年計画と、それから教育振興基本計画と整合をとりながら、今、検討を進めさせていただいているところでございます。

1の検討状況につきましてはご覧のとおりでございます。庁内の組織、市町村との合同検討チーム、また官民協働組織である県民会議等の場で様々なご議論をいただいております。

また2の目指す姿、仮に3つ挙げさせていただいておりますけれども、この中には2つ目、「育つ環境にかかわらず、子ども・若者が自分の未来を切り拓ける」という部分がありますが、この部分に関しましては、教育ということが大変重要だと我々は認識しているところでございます。

また3番の計画の構成(案)でございますが、記載のとおりではございますけれども、2番に「目指す姿と戦略」とあり、目指す姿は2番に記載したようなものでございますけれども、戦略といたしましては3つほどに絞っていきたいと考えておりまして、1つは「孤立ゼロ」ということ、2つ目は「子どもの貧困対策の推進」ということ、3つ目は、「待機児童ゼロ」というようなことで考えております。

それを踏まえて、3番目の施策の展開というところで「子ども・若者の支援」と、それから「結婚・子育て支援」の両面から施策展開すべく、検討していきたいと思っております。

具体的には裏面をご覧いただきたいと思います。上段のほうに、施策の展開(案)と書かせていただき、仮に第1章としてありますけれども、「子ども・若者の支援」の関係では、

第1節で子ども・若者の今を支えるということ、それから第2節で、子ども・若者の未来を応援するというところで施策を考えております。この未来を応援するという中で、1番には生き抜く力を育む幼児教育の推進、また3番には、初等中等教育の修学支援、4番には高等教育の修学支援ということを挙げさせていただいております、こうした部分につきまして、現在、教育委員会とも連携しながら一緒に考えさせていただいているところでございます。

また、第2章の部分は「結婚・子育て支援」となっておりますけれども、結婚の支援のほか、2節に子育てに伴う経済的負担の軽減とあります。その中でも教育費の負担軽減というところを重視していきたいと考えておりますし、3節で子育てしやすい環境の整備を図っていきたいと考えております。

一番下にスケジュールがございますけれども、11月ぐらいに計画の骨子案を作成いたしまして、パブリックコメント等を経て、来年3月に計画を決定してまいりたいと考えております。

(小岩企画振興部長)

ご説明をいたしました3つの計画でございますけれども、いずれも現在作成をしている最中でございます、随時ご意見のほうはちょうだいすることになっておりますので、またご意見がございましたらいただければと存じますが、もしこの場で特にありましたらご発言をお願いいたします。

(矢島委員)

時間のない中、細かいことで申しわけありません。国が自殺対応としてSOSを出す教育と言っておりますが、SOSを出す教育というのはとても大切だと思うんですね。嫌なときはいやだと言ってもいいし、相談してもいいということは、そういうことはとても大切です。しかし、子どもはそれまでにたくさんSOSを出していて、それでそのサインに気づく大人が少ないということ、そして気づいたとしても、その対応のまずさによって、子どもがさらに諦めてしまうということが現実にもあるかと思えます。SOSを出す教育とあわせて、長野県独自でそのSOSをキャッチできる大人の教育ということも、やはり大人も教育、学ぶということがとても大切なと考えますので、あわせて子どもも学ぶ、大人も学ぶという視点を是非持っていただきたいと思えます。

それから、自殺対策については、あらゆるところでその死ぬリスクを減らす対策ということに重点を置きがちですが、子ども一人ひとりが自分を大切と思えて、そして夢や希望に向かって学ぶ意欲を持てるような、生きる理由をつくる支援、今までの会議、本日の会議の中でも夢ということがたくさんキーワードで出てきましたけれども、その前向きに夢や希望を持てるような、そういう生きる理由をつくる支援というところも持っていただきたいなと思えます。

(阿部知事)

創造的な学びの推進と書いているんですが、ここの学びの意味しているところは、私は

大きく3つあると思っていて、児童・生徒・子どもの学びが一つ、もう一つは、今おっしゃっていただいた大人の学び、それからもう一つは職業人材の育成というような学びの大きく3つ観点があると思っておりますので、大人の学びもしっかり取り入れていきたいと思っております。

(小岩企画振興部長)

それでは、今回のこの会議の場で、教育振興基本計画につきましてはもう少し踏み込んだ議論をさせていただきたいと思っておりますので、引き続きよろしく願いいたします。

以上で本日の会議事項が終了いたしました。全体を通じて知事から発言がございますか。

(阿部知事)

今日はありがとうございました。私からもいろいろ申し上げさせていただきましたが、いわゆる学びの改革については、先ほど申し上げたように、県民の皆さんを巻き込んでの大きなうねりにしていかなければいけないと思っておりますので、是非教育委員会の皆さんには中心になっていただき、私も全面的にバックアップをさせていただきながら進めていきますので、よろしくお願いいたします。

それから、総合5か年計画については今、申し上げたような形で、広い意味での学びを中心概念に据えていきたいと思っております。安心した暮らしを実現していく上でも、あるいは活力ある産業や社会をつくっていく上でも、全ての基本が学びだと思っております。

そういう意味で、教育委員会とはしっかり連携しながら、この総合5か年計画を取りまとめて、ほかの県とは次元の違う学びの県にしていきたいと思っております。是非ご協力いただければと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

(小岩企画振興部長)

ありがとうございます。それでは最後となりますが、平林委員が明日の10月11日付けで教育委員をご退任されますので、ご退任に当たりまして、この総合教育会議に対する思い等がございましたらいただければと思っておりますが、よろしくお願いいたします。

(平林委員)

4年間、この会議ができてから4年ではありませんが、その前に知事さんとの懇談会というようなこともありましたので、おおまかに4年間と申し上げますけれども、いろいろお世話になりました。

昨日、テレビを見ておりました、複数のテレビを見ておまして、伊豆のほうで行方不明になった4歳の男の子が無事発見され、救出されたという、その時の報道で山の中で、テレビによっては体操座り、別のテレビによっては体育座り、しゃがんでいたりとか座り込んでいるとか、いろいろな表現がありましたけれども、私は体育座りにしろ、体操座りにしろ、そういう言葉を知りませんでした。委員の皆さん方から控え室において教えていただきました。そんな時代遅れのどうしようもない、アナクロ人間でピントが随分外れており

ましたが、知事さん、それから教育長さんを初め大勢の皆さん方に、サポートをしていただきお導きいただきまして、4年間、ご迷惑をおかけしたことのほうが多かったと思えますけれども、どうやら過ごすことができました。ありがとうございました。明日まで任期があるそうですので、明日までは身を律していきたいと思えます。よろしくお願ひします。ありがとうございました。

4 閉 会

(小岩企画振興部長)

以上で本日の会議事項は全て終了いたしました。これで閉会とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。